黑溝臺附近の會戰に關し左の勅語を下し賜ふ

滿洲軍は其左翼に來襲せし優勢なる敵を邀へ勇猛果敢之を渾河右岸に擊退し其企圖を挫折し多大の損害を與へたり

朕深く之に從事せし將卒の勞苦を察し其功績を嘉す

奉答に曰く

我滿洲軍の左翼を繞回し猛烈に攻擊し來りし優勢の敵軍を邀へ寒威嚴烈の際數晝夜連續奮戰の後敵に多大の損害を與へ之を擊攘したるは一に

陛下の御稜威に因る然るに參與軍隊に對し優渥なる

勅語を賜ふ臣及參與軍隊の深く感激に堪へざる所後來益々奮勵し誓て聖旨に酬ひんことを期す

右謹て奉答す

滿洲軍總司令官　侯爵　大　山　巖

明治三十八年一月三十一日

奉天附近に敵を壓迫するや左の勅語を下し賜へり

我滿洲軍は客冬沙河會戰以來銳を蓄へ敢て妄に動かず以て戰機の熟するを待ち一たび意を決して起つや全線活動敵軍を壓迫して已に能く包圍の形を占む　朕は捷報の至る毎に我戰勢の益々佳境に進むを懌び又爾將卒の餘寒尚酷烈の時に於て數晝夜に亘れる艱苦を察し軫念太た切なり其れ各自愛して耐久の勇を養ひ光輝ある功績を奏して以て

朕及び朕が億兆の信賴に答へよ

奉答に曰く

敵に一大打擊を加へんことを期したる臣等は日夜心力を盡し堅固の陣地に頑强の敵を攻擊し多大の損傷を顧みず遂に之を其陣地より擊攘し逐次之を奉天附近に壓迫し得たるも未だ全く我目的を達成するに至らず然るに今や優渥なる

勅語を賜ふ臣等恐懼爲す所を知らず唯益々奮勵し誓て

聖旨に答へ奉り併せて國民の希望を充たさんことを期す

滿洲軍總司令官　侯爵　大　山　巖

明治三十八年三月九日

奉天附近の會戰に關し左の勅語を賜ふ

奉天は客秋以來敵軍此に鞏固なる防禦工事を設け優勢の兵を備へ必勝を期し衝を爭はんとせし所なり我滿洲軍は機先を制し驀然攻進沍寒冰雪中力戰健鬪十餘晝夜を連ね遂に頑强死守の敵を擊破し數萬の將卒を虜にし多大の損害を與へ之を鐵嶺方向に驅逐し曠古の大捷を博し帝國の威武を中外に發揚せり　朕深く爾將卒の能く堅忍持久絶大に勳功を奏したるを嘉す尚ほ益々奮勵せよ

奉答に曰く

奉天附近に頑强の抵抗を試みし敵を潰亂に陷らしめ確かに彼に一大打擊を加へ此會戰に於ける我軍の目的を達したるは一に

陛下の御稜威に依る今茲に優渥なる

勅語を拜し臣等感激の至りに堪へず爾後益々奮勵し誓て聖旨に酬ひんことを期す

滿洲軍總司令官　侯爵　大　山　巖

明治三十八年三月十四日

三月十三日鴨綠江軍に左の勅語を賜ふ

我鴨綠江軍は城廠地方各所の敵を驅逐し清河城を占領し馬群丹及地塔に於て優勢の兵に對し酉寒冰雪を冒し激戰健鬪一多數の敵軍を此方面に牽制し以て滿洲軍の運動に便し遂に之を擊退し急追撫順を拔き其退路に逼り多大の損害を與へたり

朕深く爾將卒の堅忍持久偉大の戰捷を奏したるを嘉す尙ほ益々奮勵せよ

奉答に曰く

城廠撫順間各地の戰鬪に對し特に優渥なる

勅語を賜はり臣景明等感激の至りに堪へず將來益々奮勵以て

聖旨に副はんことを期す

右謹て奉答す

明治三十八年三月十四日　鴨綠江軍司令官　男爵　川村景明

七月二十九日北遣艦隊司令長官へ左の勅語を賜ふ

北遣艦隊は天候の障碍を冒して陸軍を護送し其上陸を完ふせしめて樺太占領の基礎を成せり

朕深く之を嘉尙す

片岡北遣艦隊司令長官の奉答に曰く

北遣艦隊が天候の障碍を排し樺太に對する作戰の目的を達成するを得たるは一に

陛下の御稜威と天祐とに賴るものなり然るに特に優渥なる

勅語を賜はる臣等感激の至りに堪へず尙ほ益々奮勵戰果を全ふせんことを期す臣七郎誠恐誠惶謹て奉答す

北遣艦隊司令長官　片岡七郎

明治三十八年八月五日

樺太軍に左の勅語を賜る

我樺太軍は曩にコルサコフ及其附近の敵を掃蕩して南部の占領を完くし今又首府アレキサンドロフ及ルイコフ地方の敵を擊攘して其占領を確實にせり　朕深く汝等將卒の行動敏捷にして偉大の效果を收めたるを嘉尙す

樺太軍司令官の奉答に曰く

樺太島南北要地の占領に對し優渥なる

勅語を賜ふ臣等感激の至に堪へず益奮勵以て

聖旨に報答し奉らむ臣秉濟誠恐誠惶謹て奏す

樺太軍司令官　原口秉濟

明治三十八年八月十一日

十月廿二日東鄉聯合艦隊司令長官は參內の上御前に於て海戰の經過を奉告せるに對し左の勅語を賜りたり

卿が統督する聯合艦隊の能く萬難を排して空前の偉功を奏したるは中外の齊しく瞻望する所なり

朕今卿より親しく其戰況を聽き將卒の忠烈を懷ふこと更に深し卿等其れ自重せよ

十月廿三日觀艦式に於て陛下は各司令官各艦艇長等を召され左の勅語を賜はりたり

朕親しく凱旋の海軍を閱し其軍容整齊士氣大に振ふを觀太だ之を懌ぶ汝等倍々奮勵して帝國海軍の名聲を發揚せよ

右に對し東鄉大將は左の奉答を爲せり

謹て奏す

陛下親しく觀艦式を擧行あらせられ加ふるに優渥なる
勅語を賜はる臣等光榮至大にして誠に感激に堪へず益々奮勵以て　聖旨に副ひ奉らん事を期す臣
平八郎聯合艦隊を代表して誠恐誠惶謹んで奉答す

十月十六日陸海軍に左の勅語を賜はりたり

朕が親愛する帝國陸海軍人に告ぐ

朕嚮に汝等に示すに軍人の精神たる訓規五箇條を以てし明治二十七八年役終るや深く邦家の前途を念ひ更に汝等に諭示する所あり爾來十閱年

朕が陸海軍は世界の進運に伴ひ經校大に其歩を進めたり不幸にして客歲露國と釁を啓きしより汝等協力奮勵各其任務に從ひ籌畫宜きを得攻戰機を制し陸に海に曠古の大捷を奏し帝國の威武を宇内に宣揚し以て朕が望に副へり

朕は汝等の忠誠勇武に頼り出師の目的を達し上は祖宗に對し下は億兆に臨み天職を盡すことを得たるを懌び深く其職に死し病に斃れ又は瘢痍と爲りたる者を悼む

朕今露國と和を講す惟ふに我軍の名譽は帝國の光榮と共に更に汝等の責務を重からしめ國運の隆昌亦汝等の努力に待つこと大なり汝等其れ能く朕が意を體し留りて軍隊に在る者と散して鄉閭に歸る者とを問はず常に朕が訓諭を服膺して朕が股肱たるの本分を守り益々勵精以て報效を期せよ

十二月七日大山元帥參内左の勅語を賜ふ

卿昨年以來滿洲軍を指麾し大小數十回の交戰悉く偉功を奏し以て出師の目的を達し洵に朕が望に副へり

朕今親しく作戰全局の情況を聽き更に卿の勳績と將卒の忠勇とを嘉尚す

十二月九日黑木大將參内左の勅語を賜ふ

卿第一軍を指麾し開戰第一大に敵を鴨綠江に破りし以來各地の戰鬪咸く偉功を奏し克く其軍の任務を達し洵に

朕が望に副へり朕今親しく作戰の經過を聞き更に卿の勳績と將卒の忠勇を嘉尚す

十二月二十日大本營解散仰出され左の勅語山縣參謀總長に下れり

客歲大本營設置以來卿等帷幄の機務に參畫し朕が陸海軍統帥の任を翼贊し各機關の經營其宜に適し以て交戰の目的を達し朕が深厚の倚信に副へり　朕太だ之を嘉尚す

三十九年一月十二日第二軍司令官奥大將參内報告の節左の勅語を賜ふ

卿第二軍を指麾し遼東半島に上陸し南山の敵を破り爾後各地の戰鬪咸く偉功を奏し克く其軍の任務を達し洵に朕か望に副へり

朕今親しく作戰の經過を聽き更に卿の勳績と將卒の忠勇とを嘉尚す

一月十四日乃木第三軍司令官參内報告の節賜りたる勅語左の如し

卿第三軍を指麾し堅固なる旅順要塞を攻略し且同港に據れる艦船を擊沈し爾後各地の戰鬪咸く偉功を奏し克く其軍の任務を達し洵に朕が望に副へり　朕今親しく作戰の經過を聽き更に卿の勳績と將卒の忠勇を嘉尚す

一月十七日第四軍司令官野津大將參內報告の節左の勅語を賜ふ

卿第四軍を指麾し友軍と策應して柝木城方面の敵を擊攘し爾後各地の戰鬪咸く偉功を奏し克く其軍の任務を達し洵に朕が望に副へり　朕今親しく作戰の經過を聽き更に卿の勳蹟と將卒の忠勇を嘉尙す

一月二十日鴨綠江軍司令官川村大將に賜はりたる勅語左の如し

卿鴨綠江軍を指麾し常に嶮難なる地境に行動し機を失せず奉天附近の會戰に參與して偉功を奏し〻其軍の任務を達し洵に朕が望に副へり

朕今親しく作戰の經過ヶ聽き更に卿の勳績と將卒の忠勇を嘉尙す

聯合艦隊司令長官、大山滿洲軍總司令官、各軍司令官の奉告左の如し

（一）東鄕大將の海戰經過奉告

奉告

客歲二月上旬聯合艦隊が大命を奉じて出征したる以來茲に一年有半其間海陸の交戰皇軍勝利を得ざることなく今日復たび平和の秋に遇ひ臣等犬馬の勞を了へて大纛の下に凱旋するを得たり是一つに大元帥陛下の御威德の然らしむるものにして臣等の終始感激措く能はざる所なり初め聯合艦隊の海上に第一期作戰を開始するや臣は大命に基き海陸の形勢と陸戰の方向を考察し敵艦隊の主力を旅順方面に拘束し之をして浦鹽の要地に據らしめざるを以て主旨とし先づ旅順仁川に敵を迅擊し更に數次の攻擊を重ね以て漸次に其勢力を減殺し又屢々冒險なる敵港の閉塞及敵前の水雷沈設等を試み以て敵の出動範圍を縮少するに力め尙ほ陛下艦隊の一部を常に朝鮮海峽に駐めて海上の要害を扼し以て浦鹽の敵を監視すると同時に旅順の敵に對する第二戰線たらしめたり此作戰の前期中敵は終始地理に據て退嬰を事とし我連續の攻擊も容易に其成果を收むる能はざりしが八月中旬敵艦隊主力の旅順より浦鹽に逃れんとするに及びて黃海及び蔚山沖の海戰を見るに至り期せずして全く敵の戰略的企圖を破摧し我作戰目的の過半を達成するを得たり

其後陸戰漸く步武を進め旅順の背面に對する我攻圍軍不撓の迫擊は海上に於ける耐久の封鎖と相須て遂に敵艦隊の主力を要塞の下に殲滅するに到れり惟ふに此期の作戰は戰勢の自然に伴ひて漸進微功を積み攻戰約十箇月に亘り我將卒の心力を傾注し智力を發揮したること本戰役中に冠絕し忠士の死殉難の艦亦少からざりしと雖も戰局の大勢は茲に初めて定り爾後日本海に於ける決勝の機運も又此間に萌芽したるを覺ふ

今春年改まると共に第二期の作戰に移り我艦隊は更に兵力を整頓して敵の第二艦隊に備へ傍ら露領沿海州を包鎖して敵國軍資の輸入を遮斷し時に支隊を南洋に分遣して敵の航進を威嚇するに勉め其間對馬津輕宗谷國後等の諸水道附近に於て捕獲の船舶三十餘雙を算す初夏五月に入り敵の第二艦隊近海に出現するに及びて豫め我全力を朝鮮海峽に集中し逸を以て勞に乘ずるの策を取りしが我將卒の勇敢なる動作は神明の加護に由り著々其功を奏し日本海々戰の一擧敵影を海上より掃蕩し以て此期の作戰を終結するを得たり

爾來海洋は名實共に我艦の制壓に歸し作戰第三期に入りしも負擔の任務は大に輕減し或は陸軍と與に樺太の攻略に從事し殆んど一兵を損せずして協同の任務を果し或は時々北韓方面に作動して敵を脅威し且つ依然露領の包鎖を續行して休戰復和の終局に至る迄確實に之れを維持せり

之を要するに聯合艦隊の作戰は第一期に於て戰勢を定め第二期に移りて戰勝を決し第三期に入りて戰果を收めんとしたるものにして其間緩急難易の差ありしと雖も全局に亘る一貫の攻戰は其始より順當に經過し終に今日にあるを見るに到れり今や凱旋して東京灣に集合せる艦船大小百七十餘隻固より戰役に亡失したるものありと雖も更に戰利として獲得したるものを加へ尙ほ能く戰前に劣らざる武力を保有するを得たるは臣等の誠に光榮とする所なり終に臨み聯合艦隊は滿韓の陸戰の効果に依り其餘利を蒙りたること少なからず又海軍大小諸機關の整備活動其他諸官衙の支助協力に依り海上の作戰遺なく進捗したることを感喜す茲に謹んで海上作戰の經過を報告し大命に對する責務の結了を奉聞す

明治三十八年十月二十三日

聯合艦隊司令長官　東郷平八郎

臣　嚴

（二）大山總司令官復命書

客歲六月滿洲軍總司令官たるの大命を奉じ爾來遼陽に敵の戰略要地を奪ひ沙河に其南進の鋭鋒を挫き旅順に堅城を陷れ黑溝臺に敵の大企圖を摧き奉天に大軍を擊碎し其他大小交戰數十回一として戰捷を博せざるなく以て開戰當初の目的を達するを得たるは偏に

陛下の御稜威と將卒の忠勇に依らずんばあらず尙ほ國民の忠愛なる後援は有形無形上將卒の志氣を鼓舞し海軍の偉大なる戰捷は沿海の作戰に大なる効果を及ぼし殊に軍の大動脈たる海上の連絡線を鞏固にし內外當局官憲の熱誠なる努力は中外の事情を明瞭にし諸般の補給を確實にし衞生の効果を全ふし以て作戰の指導に一大援助を與へたり是れ臣等の常に感喜する所なり而して生命を犧牲に供したる幾多將卒の爲めには哀悼の情を禁ずる能はず今や平和克復し圖外の任全く畢り天顏に咫尺するの光榮を得感激の至りに堪へず

尙各軍に於ける作戰の概況は其凱旋に應じ當該司令官をして奏上せしむ

右謹て復命以聞す

明治三十八年十二月

滿洲軍總司令官　侯爵　大山巖

臣　爲　植

（三）黑木大將の奉奏文

圖外の重任を辱ふし帝國陸軍の先頭として大同江口に上陸したる以來茲に十有餘月其間韓國に滿洲に常に地形嶮難人烟稀少の地域に行動し雄大强勇なる敵に對し大小五十餘戰臣等の不敏を以てして幸に

陛下の重寄に對し甚しき過失なく茲に犬馬の勞を畢へ

大露の下に凱旋し戰況を伏奏するに至れるは是れ偏に　陛下の御稜威と御歷代列聖の冥助との然らしめしものにして臣等感激措く能はざる處なり

尙ほ本戰に於て臣等が能く其任務を達成し得たるは上級統帥部の籌畫指導と陸海友軍の協力援助後

方勤務諸機關の勉勵官民舉國一致の後援等に負ふ所のもの亦多大なりとす
茲に大命に對する任務の結了を奏聞するに當り
陛下の忠勇なる幾多將卒を戰場に喪ひ今日與に此盛典を拜するを得ざるは臣爲禎の特に恐懼痛恨に堪えざる處なり誠恐誠惶謹て奏す

明治三十八十二月九日

第一軍司令官　男爵　黑木爲禎

（四）　奥大將の復命書

復命書

臣　保　羣

曩きに　詔を奉じ第二軍を統率して征途に就き海軍の協力に依り敵に近き遼東の一角に上陸し直に敵の南北交通を絶ち進みて南山の壘を拔き旅順要塞をして孤立せしめ更に北して南下の敵を得利寺に擊攘して營口を占領し之より遼陽黑溝臺奉天の諸會戰に參與して勝を制することを得たり是れ上級指揮官の指導宜しきを得友軍の協同機に合し軍の諸機關克く責を盡し部下の將卒臣が命に服し死力を盡して報効の誠を致し加ふるに忠愛なる國民の後援久ふして益々熾んなりしに依ると雖も深く其依て來る所を察すれば一として
陛下御稜威の致す所にあらざるはなし今や干戈の事全く歇み凱を闕下に獻じて天顏に咫尺することを得たり　天恩偃渥臣感激の至りに堪へず

明治三十九年一月十二日

（五）　乃木大將の復命書

復命書

第二軍司令官　男爵　奥　保　羣

臣　希　典

明治三十七年五月第三軍司令官たるの大命を拜し旅順要塞の攻略に任じ六月劍山を拔き七月敵の逆襲を擊退し次て其前進陣地を攻陷し鳳凰山及干大山の線に進み以て敵を本防禦線内に壓迫し我海軍の有力なる共同動作と相須て旅順要塞の攻圍を確實にせり八月大孤山及高崎山等を陷れ次て强襲を行ひ東西盤龍山の二壘を奪ひ爾後正攻を以て攻擊を續行し逐次要塞に肉薄し十一月下旬より十二月上旬に亘り二百三の高地を力攻し遂に之を奪取し港内に蟄伏せる敵艦を擊沈せり既にして攻擊作業の進捗に伴ひ其三永久堡壘を占領し直に望臺附近一帶の高地に進出し將に要塞内に突入せんとするに當り三十八年一月一日敵將降を請ひ茲に攻城作戰の終局を告げたり
時に北方に於ける彼我兩軍の主力は沙河附近に相對し戰機正に熟し軍の北進を待つこと急なり依て一月中旬行進を起し二月下旬遼陽平野に集中し直に運動を開始して奉天附近の會戰に參與し全軍の最左翼に在りて繞回運動を行ひ逐次敵の右翼を擊破し奉天西北方に邁進して其退路に逼り連戰十餘日尙敵を追蹤して心臺子石佛寺の線に達し一部を進めて昌圖及金家屯附近を占領せしめたり
五月各軍と相連りて金家屯康平の線を占め尋で敵騎大集團我左側背に來襲せしも之を驅逐し茲に軍隊の整備を終り戰機の熟するを待ちしが九月中旬休戰の命を拜するに至れり
之を要するに本軍の作戰目的を達するを得たるは　陛下の御稜威と上級統帥部の指導並に友軍との

協力とに依る而して作戰十六月間我將帥の常に勁敵と健鬪し忠勇義烈死を見ること歸るが如く彈に斃れ劒に殪るゝ者皆　陛下の萬歲を喚呼し欣然として瞑目したるは臣之を伏奏せざらんと欲するも能はず然るに斯の如き忠勇の將卒を以てして旅順の攻擊には半歲の長日月を要し多大の犧牲を供し奉天附近の會戰には(……)退路遮斷の任務を全ふするに至らず又敵騎兵大集團の我左側背に行動するに當り之を擊碎するの好機を得ざりしは臣が終世の遺憾にして恐懼措く能はざる所なり

今や闕下に凱旋し戰況を伏奏するの寵遇を荷ひ恭しく部下將卒と共に天恩の優渥なるを拜し顧みて戰死病歿者に此の光榮を分つ能はざるを傷む爰に作戰經過概要死傷一覽表並に給養及衛生一般等を具し謹んで復命す

明治三十九年一月十四日

(十八)　野津大將復命書

第三軍司令官　男爵　乃木希典

臣　道貫

大命を拜し大孤山の一角に上陸し獨立第十師團の任務を繼襲して第四軍を統率せし以來析木城を攻略して第一第二軍間の連繫を鞏固にし遼陽南面の堅壘を陷れて敵を太子河の右岸に壓迫し沙河會戰に於ては敵を三塊石山に擊破して西溝山勝山間一帶の高地を奪取し奉天會戰に方りては先づ漢城堡壘を拔き次て渾河堡及び其北方より七間房に亘る渾河右岸の敵陣を突破して奉天を東方より包圍し當面の敵軍をして幾ど殲滅に歸せしめたり

懸軍深く朔北の野に入り征役幾ど二裘苟に亘りしと雖も旺勃たる士氣は一難を經る毎に一倍し來り陣中衞生の如きは有史以來未曾有の好果を收め得たり臣道貫の之を以て本大戰役に於ける一方の統帥に任じ甚しき過失なきを得たる所以のものは是れ全く　陛下の聖旨を體して高級統帥の指導周到なりしと各部團隊の畫策指導其宜しきを得たるの致す處にして國民後援の力亦與て多きに居るものたるを感銘す

軍は屢々敵の中堅に衝突し戰勝は多大の犧牲を以て之を購ひ得たるの場合多く爲めに陛下の忠良を矢石の間に失ふこと多かりしは臣の夙夜恐懼措く能はざる處なり

今や軍司令部の凱旋に際し　天顏に咫尺して作戰の經過を奏上するの光榮を荷ひ感泣の至に堪へず

茲に作戰經理衞生の概況通信網目並に兵站設置圖の別冊を具し誠恐誠惶謹て復命す

明治三十九年一月十七日

(七)　川村大將復命書

第四軍司令官　伯爵　野津道貫

臣　景明

乏しきを鴨綠江軍司令官の榮職に承け客歲一月闕下を拜辭し戰地に赴きたる以來常に道路險惡給養不便なる滿洲東部の山地に行動し清河城、地塔、馬群丹、撫順、五鳳樓及英額城等各地の戰鬪に於て悉く勝利を博し軍の任務を達成することを得たるは上級統帥部の畫策指導宜しきを得たると友軍の協力各機關の奮勵將卒の忠勇並に國民後援の致す所なりと雖も皆偏へに　陛下の御稜威に由らずんばあらず是れ臣等感激措く能はざる所なり

今や平和克復し臣等凱旋の榮譽を荷ひ今日天顏に咫尺するの寵榮を辱ふするに當り幾多忠勇なる戰歿諸將卒と此光榮を共にするを得ざるは臣景明の恐懼且つ遺憾に堪へざる所なり此に別紙作戰概況人馬一覽表、衞生、給養、及兵站設備概況書を具し謹んで奏上す

鴨綠江軍司令官　男爵　川村景明

（八）　大觀兵式勅語及大山元帥の奉答

四月三十日天皇宵山練兵場に凱旋全軍代表部隊の大觀兵式に臨み左の勅語を賜ふ

朕茲に凱旋軍を集合して親しく觀兵式を擧げ軍紀大に振ひ隊伍克く整ふを認め朕深く之を懌ふ汝等益々奮勵し以て帝國陸軍の發達進歩を期せよ

諸兵指揮官たる大山元帥の奉答に曰く

陛下茲に凱旋軍を親閲あらせられ特に優渥なる　勅語を賜ふ臣等感激の至りに堪えず益々奮勵努力以て聖旨に副ひ奉らんことを期す臣嚴凱旋軍を代表し謹て奉答す

明治三十九年四月三十日

三十七八年戰役陸軍凱旋觀兵式諸兵指揮官元帥陸軍大將　侯爵　大山　巖

日露戰役史正誤

頁	行	誤	正
前編			
七五の八		露國の陸	陸の下「軍」の字を脫す
四九六の註記中		遼江丸二等信號兵曹田中太郎吉	一等信號兵曹
四九七の註記中		小樽丸二等信號兵中野耕作	一等信號兵曹
八二〇の八		天明出雲(艦長海軍大佐吉松茂太郎)	出雲と艦長との間に「(艦長海軍大佐伊地知季彥)吾妻(艦長海軍大佐藤井較一)常磐」の二十五字を脫す
附圖		蔚山沖海戰八月二十四日	廿四日は「十四日」の誤刻なり
後編			
一四一の一		「移動性目標第三擊破」の下	「の前提」の三字を脫す
一七三の二		第一節黑流蠢戰前後に於ける敵狀	戰「前後」は戰「後」の誤なり
三二一の三		タイムスの	タイムスは
同ノ四		相對照して	彼此相對照して
五五八の五		「ぺし」の下	「尋て四月三十日を以て陸軍大觀兵式を靑山に擧行し天皇親しく之に臨む大山元帥之れが諸兵指揮官たり戰後參加の諸將軍皆之に參ず」の註記を脫す
六二九ノ註記欄內		日本損害の次へ	ノウオエウレミヤの報ずる所に依れば露國が戰時中ホ國より滿洲に送りたる兵數は將校二萬、兵卒百二十七萬にして戰爭終結當時戰地にありたる員數は將校一萬二千五百、兵卒十萬九千七百、兵卒三十萬七千なれども開戰前より滿洲に駐屯居たる兵數は此に加へらざる可しとい倘ほ右の損害は全損害の病者を以て出づるものにして上の損害に加へられば更に大敗にしるや勿論實上の損害なり」の註記を脫す

明治三十九年五月十二日印刷
明治三十九年五月十五日發行

定價金弐圓五拾錢

早稲田大學編輯部編纂
編纂代表者　巽　來治郎
發行者　荒川信賢
東京市小石川區音羽町四丁目十一番地
印刷者　藤本兼吉
同牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
刷所　株式會社秀英舍第一工場
同牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

不許複製

發行所
東京府豐多摩郡戸塚村六百四十七番地
早稲田大學出版部
電話番町三七四番

84
239

84
239